

生活領域としての地域

尾崎芳治

(一)

およそ物事を考察するにあいには、わたくしたちは、自ら体験的に確認できる事実から出発しなければなりません。ここでは、端的に根源的な、現に、わたくしたちが生活することで生存している、という現実です。

人間の生存には、まず、生(生命・生活)の個体としても類としても、物質的生産がなければなりません。それは、同時に、人間が自らの精神的な生活の生産をする過程でもあり、両者はないあわせになっていて互いに規定しあう一体をなしています。生の生産と再生産がとる一定の仕方・様式は、とりもおさず一定の生活様式ですが、物質的・精神的なこの生活様式の総体が、文化です。

物質的生産のよりどころは、土壌・大気・水圏・生態系をひっくるめた土地自然としての大地です。現生人類(ホモ・サピエンス・サピエンス)は、ほぼ 20 万年前にアフリカで誕生し全地球上に拡がった、といわれていますが、人間にとって生活という営為は、つねに一定の広がりをもつ大地を事実的に支配(占有)することと同じだったのです。労働を加え、自然素材を変形させ、生活手段の形態で取得するという営みは、大地ぬきにはありえなかったからです。ですから、人類の大移動がひとまず終わって近代とりわけ 19 世紀ともなれば、開拓のクワをまつだけの広大な無主地など、シベリアだろうが、北アメリカだろうが、存在するはずもありません。それらは、住民の眼を知らず、ただ地と血に飢えて文化の伝道師をきどる植民者の眼に映じた幻影にすぎません。

いまこの生活の場に生活者たちを立たせてみましょう。かれらの生活に不可欠な一定の広がりをもつ大地は、そのままかれらの原初の生活領域であり「オラガ」地域です。生活領域としての地域は、ながくつづいた原初の諸形態のあと、大きく変化して今日に至っています。それらがどのように概念できるか、この問いに答える準備は、わたくしにはまだ整っていません。ただ生活に焦点をあて、生活者の眼で、生活の場において考察するときだけ、途が開けると思っています。

(二)

生活領域としての地域の主体は、現実生活中を営んでいる人間、すなわち、生活者であり住民です。この点から焦眉の問題——憲法に目を投じて見えてくるのは、主権者とはすぐれて、生活者＝住民のことであり、主権とは、かれらの生活権・生存権であるということです。どんな自由・自立・尊厳も、生活権・生存権がなければ、ただの画に描いた餅にすぎません。

その権利を保障することが、たとえ建前であるとしても、国家の役割です。憲法でいえば、第 25 条の生存権

が主権の内容です。そうだとすれば、主権者を「国民」---People を「国民」として訳して「国民」に属する人間という規定性が故意に付け加えられている---という間違った枠組にはめ込んで、国家のためにかれらの生命そのものを、つまり生きた個人を軍事力に編成して、他国の人々と生命の奪い合いさせるということはあつてはならない、それは自己矛盾なのです。第九条も、生活者=住民の生存ということからすると、極めて自然なものであり、生活者の主権ということから発想して、根拠づけなければ、守り切れません。

(三)

地域を生活領域と規定したばあい、既にのべましたが、その前提である物質的・精神的な生活様式の総体が文化です。したがって、人間が生存しているところ、必ず文化が存在するし、文化間には、価値の上下は存在しない、いうならばイコールバリューと考えるべきです。なぜなら、生きることが、基本的な欲求であり、何人も否定できないからです。同時に、文化は、それを支える土地自然の諸条件、近隣との諸関係などによって規定されます。それゆえ、文化は、それぞれ独自性を持ち、相互に異文化として存在しています。

文化と文明とがしばしば全く対立的に語られたりしますが、わたくしは、文明もまた文化だと考えています。文明とは、一定の時代なり、地域なりにおいて最も普遍性の高い文化のことです。したがって、それは相対的な概念ですから、日本列島だけを考えれば、ある時期まで久しく京都の文化が日本列島の文明として君臨してきたともいえますし、東アジア全体を見れば、黄河文明が最も普遍性のある文化として存在したともいえるわけです。

文明が最も普遍性の高い文化だとすれば、当然のこととして、異文化であるものが、相互に交雑することを通じてのみ、文明が形成されることとなります。それぞれの文化の担い手は相異なる人間集団ですが、その人間集団が文化を交流し、生活者にとってより好ましいと思われるものを相互に学習し、それを堆積し、それを通じて、文化を、一層、普遍性の高いものへと洗練します。このばあい、ある順序が働いています。学ぶ、つまり「真似る」、模倣すること、それに繰り返し改良を加え、独創性に到達していくという順序です。何よりも重要なのは模倣する能力です。模倣を通じて、改良を経て、独創へと、ある種イノベーションが起こり、資質そのものが変わり、文明が生み出されます。

また、文明を担う人間集団は、その地域において、最も主体的にも交雑度の高い、つまり雑種であると、一般的にいえるでしょう。このことは、純粹の民族とか純粹のネイションとかいったものを、特殊に取り出して、それを輝かしい文明を作り出した人間集団であるというのは、嘘だということを示唆しています。文明は、積極的な相互学習を通じて、模倣、改良、独創という3つの過程を倦むことなく続けていく限りで、前進し、いよいよ支配的な文明として影響力を強めることとなります。文明の形成とともに、最初に出発した地域も、文明の上に成立する大帝国の支配領域といったものへと変貌する、そのような過程は世界史ではしばしばみられることです。

(四)

地域は決して地方ではない。中央があつて、その末端を代行する、あるいは中央によって顎使される地方では決してありません。地域は、人間が本質的に生活し、生存して行く上で必要不可欠な生活領域です。その視点からみると、文明は、文明的生活領域の大きさにみあつてそれを構成する諸地域をもっていますが、地域こそが重要です。なぜなら、地域にこそ過去があり、未来があるからです。

いうまでもなく現代は資本主義の時代ですが、資本主義は、いやおうなしに中央集権的な体制を作り出し、地域を地方化する傾向をもっています。そのため、地域は枯死してしまう状態に事実上おかれてしまいます。今日、広くみられる現象です。しかし、それにもかかわらず、地域が、人間生存の基本的な原点である限り、地域を殺してしまうと、わたくしたちは本当の意味での暮らしを継続していくことができません。どうすれば地域を復活できるかという発想ではなく、地域がおかれている現状を直視し、どうすれば新しい地域を創造できるのかという発想でとり組まなければ、わたくしたちは道を誤り、既存の政治組織に取り込まれてしまいます。

未来のことをのべましょう。地域は自立した個体の集合体です。そのかれらが、お互いに、生活のネットワークを作りあげ、それを、一方では地域に根ざしたローカルなものである、と同時に他方ではグローバルに連携して、通常の行政域を越え、国境さえも越えて、地域と地域とを結びながら、相互情報伝達、相互学習、相互改良、独創の相互供給の生活ネットワークに進化させます。そのようなネットワークが、多様に、縦横無尽に結び付いているという状態になったとき、ふと気が付けば、大国を誇示している大帝国が崩壊し、地域で生きている人間が、グローバルに連帯し、主人公となっているという社会が形成されます。生の生産そのものの基礎が、生の生産過程に転化された自然の過程として編成されるようになると、それは、未来社会へと繋がっていくと思うのです。人間の未来は、そこにしかないのではないのでしょうか。

(以上は、2007年9月11日に尾崎先生宅で先生からインタビューしたものを、インタビュアーの阿知羅隆雄がテープをおこしたものである。)